



2009年12月9日放送

## 漢方頻用処方解説 半夏厚朴湯①

慶應義塾大学 漢方医学センター 講師 西村 甲

まず、半夏厚朴湯の主な効能について、説明します。本剤は浅田宗伯が「気剤の権輿<sup>けんよ</sup>」というように、いわゆる気剤の代表処方といえます。原典には、「咽中炙癭」と記載されていることから、「咽の異物感」があることが目標の一つとなります。この意味は、咽にあぶつた肉、あるいは梅核気、梅の種のようなものが引っ掛かっているような異物感があり、吐き出そうとしても出せず、飲み込もうとしても飲み込めないという特有の症状があります。ヒステリー球といわれるような一種の精神症状と解釈されております。しかし、必ずしも、この症状に束縛されるわけではなく、幅広く神経症に用いられております。主な適応症状としては、咽喉の異物感、嘔吐・悪心などの胃腸症状、呼吸器症状、抑うつ的な神経症状などが挙げられます。

半夏厚朴湯は、金匱要略の婦人雜病篇に収載された方剤です。条文には「婦人、咽中に炙癭あるがごときは半夏厚朴湯、之を主る」と記載されています。また、千金方には「胸満、心下堅く、咽中帖帖<sup>ちよう</sup>として、炙肉有るが如く、之を嘔せども出でず、之を吞めども下らず」とあります。処方名の由来ですが、古方は、一般的に、方剤の主役となる生薬を方剤名とすることが多く、半夏厚朴湯も、半夏と厚朴が主役となると考え、命名されたと思われれます。小半夏加茯苓湯は半夏湯ともいわれ、基本の半夏湯に加味された薬味を代表する厚朴を続けて、半夏厚朴湯の方名が生まれたとする解説もあります。

生薬構成から、半夏厚朴湯の効果をみてみますと、小半夏加茯苓湯に厚朴と蘇葉を加えた方剤とみることができます。小半夏加茯苓湯は吐き気がある場合によく用いられる方剤です。妊娠中の吐き気である悪阻おそに用いられることでも有名です。水毒による胃内停水を改善する効果があります。この中に含まれる生姜・半夏・茯苓について解説します。

生姜は、ショウガ科のショウガの根茎です。発汗作用、健胃作用が知られています。

半夏は、サトイモ科のカラスビシャクの球状塊茎です。制吐作用、鎮静作用、眼圧低下作用などがあります。

茯苓は、サルノコシカケ科のマツホドの菌核です。多くは松の根に付着して成長します。この松の根に付着して発生したものが茯苓で、松の根の回りに、根を包み込むようにしてあるものは、茯神として別名がついております。利尿作用、滋養作用、鎮静作用があります。先ほどの茯神は鎮静作用が強いとされています。

小半夏加茯苓湯は、小半夏湯という生姜と半夏の二味の方剤で、嘔吐を中心とした胃腸症状に対応する方剤にさらに茯苓が加えられ、胃腸機能の改善、水分バランスの調節、さらに精神状態を改善していくことが理解されると思います。

次に、小半夏加茯苓湯に加味された厚朴と蘇葉の解説をします。

厚朴はモクレン科のハウノキまたはカラハウの樹皮で、クラーレ様の筋弛緩作用、中枢性筋弛緩作用、抗ストレス性潰瘍作用、抗アレルギー作用などが知られています。

蘇葉は、シソ科のシソの葉で、中枢性抑制作用、抗アレルギー作用が知られています。

以上より、半夏厚朴湯は厚朴・蘇葉が中心となって、不安に関連した筋緊張を緩和し、鎮静作用を発揮し、半夏が中心となって体内にたまった痰飲を除去すると考えられます。ですから、方剤の基本構成をなす小半夏加茯苓湯としての吐き気などの消化器症状の改善効果も期待できます。

次に、古医書における処方解説と症例報告を紹介しましょう。

曲直瀬道三は、『衆方規矩』の中で、人の様々な感情がバランスを失って、平常でなくなり、心腹脹満するものによい。気鬱から痰飲が発生して、咽喉に間にたまり、心窩部が痞満して喘鳴、呼吸速迫となるものによい適応と述べています。

香月かつきぎゆうざん牛山は、『牛山方考』の中で、構成生薬が少なくて効果発現が早い、『牛山活套』の中で、痰あるいは水毒が元にあつて、胸痛・心痛・気鬱があれば効果があるといっています。

吉益東洞は、『類聚方』の中で、動悸症状の存在を指摘し、『方機』の中で桂枝湯の証があり、痰飲が存在する場合には桂枝湯と半夏厚朴湯を合方すると述べています。

福井ふじ楓亭は、『方読弁解』の中で、後世派は噎膈、つまり、食道の通過障害を呈する場合にも用いるとするが、効果はない、半夏によって血が乾く、もともとの金匱要略・千金要方の指示に従って、婦人にも用いるべきである、と述べています。

和田東郭は、『蕉窓方意解』の中で、腹部所見が重要で、心窩部が堅く膨満するという心下鞭満があり、さらに鬱々と悶え、思い悩むことが多いことが方剤選択のポイントと指摘しています。ただし、この場合、瀉心湯類、建中湯類の適応でないことを忌ましています。咽中炙癆は心下痞鞭をもとに発生するものであり、半夏厚朴湯のような淡白な味では胃腸に悪影響が出にくく、心窩部の支えも早く取れると述べています。また臨床アドバイスとして、咽喉不利があれば総て半夏厚朴湯の適応ではなく、安中散などの牡蛎が含まれるもの、呉茱萸湯や当帰湯などの呉茱萸が含まれるもの、人参湯などの甘草・乾姜が含まれるものによって改善する場合がありますと指摘しています。

浅井貞庵は、『方彙口訣』の中で、気のめぐりが悪いために起こる喘に用いられると述べています。

尾台榕堂は、『類聚方広義』の中で、この症は後世にいわれる梅核気のことで、妊娠悪阻を治療する場合に非常によいと指摘しています。

本間棗軒は、『内科秘録』の中で、噎膈において、症状が変化して、痰が多く、頻回に嘔吐する場合に、半夏厚朴湯あるいは茯苓飲加呉茱萸を選択すると述べています。

小島 明は、『聖劑発蘊<sup>うん</sup>』の中で、本方が適する患者では胸は平らで、大きく、胸中に痰を蓄え、咽中にひらひらと引っ掛かる、通常とは異なる発声となり、あたかも目と鼻の間から声が出るような感じがすると述べています。

浅田宗伯は、『勿誤藥室方函口訣』の中で、気剤の第一処方であり、咽喉の異物感ばかりでなく、諸々の精神的症状に用いられる。女性ばかりに用いられる方剤ではない、と指摘しています。

湯本求真は、『皇漢医学』の中で、半夏厚朴湯の症状・所見として認められる胸満・心下堅とは、心窩部の膨満と、按じた場合の堅さを意味するが、大柴胡湯のように内部が充満するものではなく、内部に阻滯がないため、外部の堅さがあっても、内部は中空の状態であり、抵抗がないような病態である。これは、方剤中に半夏・厚朴があり、枳実・大黃がないことが理由として挙げられると指摘しています。